

大阪商業大学学術情報リポジトリ

江戸時代後期から幕末にかけての文芸・美術における囲碁の影響 —
川柳や狂歌などの文芸作品や浮世絵・伝統芸能における囲碁の役割についての一考察 —

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2021-12-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古作, 登, KOSAKU, Noboru メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1082

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



江戸時代後期から幕末にかけての 文芸・美術における囲碁の影響

— 川柳や狂歌などの文芸作品や浮世絵・伝統芸能における
囲碁の役割についての考察 —

古 作 登

〈1〉はじめに

本稿では日本の伝統遊戯である囲碁が、江戸時代に隆盛した代表的な文学作品の川柳や狂歌でどのように表現されたか、また当時の絵画作品として代表的な浮世絵にどのように描かれたかを調査するとともに、これらに関連した演劇の歌舞伎や文楽における表現についても分析し、囲碁史においてどのような意味を持っていたかを考察する。

中世においては説話集の『今昔物語集』や歴史文学の『太平記』などに囲碁に関する記述がしばしば見られる。このころ知識階級にとって囲碁は教養、また社交のツールとしてとしたしなむべき技芸であり、宮中の貴族や僧侶、また政治の実権を握る武士たちの多くが囲碁に接していた。こうした背景があったことで囲碁は絵画にも描かれ、古くは『源氏物語絵巻』の女官たちの対局風景や『鳥獣人物戯画』など、平安時代末期から鎌倉時代初期にはいくつかの作品が生まれ、数百年の歳月を経て印刷技術の普及に伴って江戸時代の浮世絵にも反映された。

庶民に囲碁が広まるようになったのは戦国時代が終わりを告げた17世紀、江戸時代に入ってからで、江戸後期になるとかなりの層に普及した。この時代に花開いた文化は川柳、狂歌、歌舞伎、人形浄瑠璃（文楽）、浮世絵など多岐にわたる。次章以降では各種文芸作品や浮世絵・伝統芸能になぜ囲碁が用いられたのか、背後に含まれる意味も併せて見ていく。

〈2〉 文芸作品に見る囲碁

庶民が作品を鑑賞したり、時には自らが作者となって楽しんだりする江戸時代の代表的な文芸作品が雑俳や川柳である。これらの作品の中では庶民の娯楽として代表的な将棋同様、碁は題材として数多く詠まれた。江戸期の川柳は雑俳の一種で前句付の点者だった柄井八右衛門（1718年～1790年）が柄井川柳と号して祖となり大流行した。本章ではまず古川柳と呼ばれる江戸期の作品を中心に碁の歴史や風習を基に解釈し、その意味を考察していく。

次に取り上げる狂歌は、和歌の形式の中に古典を風刺した内容や、俗世間の人情を詠んだもので、古くは平安時代から存在したが、室町時代中期以降笑いを好む支配層を中心に広まった。庶民文化が盛んになった江戸初期にはあまり顧みられなかったが、18世紀後半に入ると「天明狂歌」と呼ばれる新たなジャンルが生まれて川柳同様に社会現象となり、知識層を中心に流行した。本章では狂歌に詠まれた碁についても検討する。

◆雑俳・川柳

◎作品1 碁会所で見てばかりいる強いやつ（誹風柳多留）

（大意）碁会所に来ている客なのに、自分は打たず他人の対局を見ているばかりの人は、一般の客では相手にならないくらいの強い打ち手なのだろう。

庶民文化が隆盛した江戸時代は主として床屋、風呂屋などが囲碁の対局場となったが、そのうち囲碁だけを対局するための会所が設けられるようになった。会所に入るには入場料が必要だが、お金を払ってそこにいるにもかかわらず、一向に打とうとせず他人の対局を見ているばかりの人を「実は強者ではないか」と詠み手が見立て、さまざまな想像をしている様を表現した川柳。囲碁はその人の性格を表すという意味の句でもある。

勝負事は好きでも自分の強い弱いあまり気かけず、対局することより観戦のほうを好む囲碁ファン（実は負けず嫌いで打たないこともある）は現在でも存在するので、勝負好きの人間の気質をうまく表現した作品といえるだろう。それゆえ、現代においてもめったに対局しない囲碁ファンの例えとしてしばしば引用される有名な作品である。

◎作品2 三度目の使で医者碁を崩し（万句合）

（大意）碁を打っている町医者の元に、診療に来てほしいという患者の家族（あるいは知り合い）の使いが来たが、医者は碁に夢中でなかなかやめられない。三度目のときようやく碁石を崩

し、対局を中断して病人の元に向かったという情景。

大切な仕事であっても碁を打っているとつい夢中になってしまうことを滑稽に表現した作品。おそらく二度の使いが来たときには「この碁が終わってから行くから」と答えたのであろう。対局者はどちらも長考で勝負が終わらなかったのか、それとも敗れた方が「もう一番」と希望し、延々と碁が続いていたのかもしれない。医者や町人の中でも社会的地位があり信頼されており、こうした層に碁が広まっていたことも本句からわかる。享保7年（1722年）には江戸で困窮者を対象とした小石川養生所が設立されるなど医療に関する幕府の支援は始まっていて、当初は幕医が診療したが天保年間末期には町医者が担当するようになった。

本作は安永8年（1779年）の『万句合』に掲載されたもの。この少し前、明和期の『万句合』には文字通り1万を超える句が集まったという。このような人気を背景に、付け句の優秀作を集めた『誹風柳多留』が江戸中期の明和2年から幕末の天保11年（1840年）まで167編も刊行され、その中にも碁を詠んだ句は多い。

◎作品3 如来手は死石をすくふ碁の上手（俳諧広原海）

（大意）如来手を使って碁の上手は死に石でも救ってしまう。如来手（にょらいしゅ）とは仏教の如来様の手という意味。碁においては死んでいたはずの石が他力（相手の失着やパスより悪いお手伝い）によって奇跡的に生き返ることを意味する。

碁の上手は、碁の技術が高いことで仏のごとき「如来手」を用いて死んでいるはずの石を復活することができる、とも解釈できるが、相手の死に石を慈悲の心を示すかのように助けてしまい、助けてしまった拙い打ち手に対し「上手」という皮肉を込めた表現とも解釈できよう。「如来手」という用語は、江戸時代では囲碁を詠んだ川柳にしばしば用いられているが、近代以降はほとんど用いられなくなっている。現代に比べると江戸時代は人々の仏教に対する信仰が篤かったからかもしれない。本作は元禄16年（1703年）刊行の『俳諧広原海』に掲載されたもので、著者の立羽不角は俳諧師として多くの門弟を集め一派を成した。

◎作品4 持碁打ってともに盤下を滑川（誹風柳多留）

（大意）対局が持碁（引き分け）になったため、両対局者とも盤の下にアゲハマが落ちていないか（もしアゲハマがあれば相手の地に埋めて勝ちになる）なめるような目つきで探している。勝ち負けにこだわるへボ碁の打ち手の仕草を滑稽に描いた句。

「滑川」は北国街道の宿場町の名（現・富山県滑川市）を「なめるように」の意味で使った

地口、洒落である。似たような地名を用いた江戸期の地口として現在でも「草加越谷千住の先」(そうか、その手はそういう意味だったのか)などは囲碁・将棋の対局時に用いられる。

アゲハマを対局前に隠しておいて不正に勝ちを得る(隠しておいた石の分だけ地を得る)ことを「寝ばま」と呼ぶが、本作の打ち手は不正をするわけではなく、対局中に石が飛んだり、アゲハマをこぼしたりするくらい目の前の盤面に夢中になっていたのだろう。

◎作品5 野間台の平仄らしい碁盤の図 (誹風柳多留)

(大意)『江談抄』に書かれた『野間台詩』¹⁾の解説の助けになるような平仄と思われる複雑怪奇な何か意味ありげな碁盤の図を詠んだ句。今打っている碁の石が(ヘボ碁のため)バラバラでパッと目にはどう打ったかも判別できないような局面になっているのかもしれないし、棋書にある図面が簡単に理解することのできない難しいものなのかもしれない。

本作は相当な教養のある知識人(町人や武士)が詠んだものであろう。『江談抄』や『吉備大臣入唐絵巻』にも描かれた、真備が唐で皇帝に野間台詩の解説を命じられたエピソードを題材にしている。この詩は文がバラバラの暗号のようでまともに読むことができないようになっていたが、神仏に祈ると蜘蛛が落ちてきて文字を指し示し、読むのを助けてくれたという。江戸時代には『野間台詩』からヒントを得た題名が言葉遊びになっている『野暮代之侍』のような風刺作品がいくつも作られ、庶民にもその存在は知られていたと思われる。

◆狂歌

◎作品1 淋しさは碁の相手さらになかりけり 手もや、寒き秋の夕暮れ (家つと)

(大意)碁の相手がないことは淋しいことだ。季節の移り変わりで少しずつ寒くなってきた秋の夕暮れ時、ふだん碁を打っている手も、打つことができず使わないため、いっそうその寒さが感じられる。

「秋の夕暮れ」という言葉は『新古今和歌集』など和歌に多く使われている。この狂歌に関連した有名な作品に「さびしさはその色としもなかりけり まき立つ山の秋の夕暮れ」(『新古今和歌集』秋 寂蓮法師)がある。この狂歌では碁を題材に詠むことで「本歌取り」の意味を持たせるだけでなく、言葉のリズムも諧謔的な味わいを出している。本作のように狂歌の中には古典的な和歌の名作を模したものがかなりの数存在し、趣を味わうには古典の知識が前提になっている。本作が掲載された享保十四年(1729年)の『家つと』は油煙斎(鯛屋)貞柳の著作。貞柳は菓子商の家に生まれ幼いころから文人の素養を身に付け狂歌師として江戸中期に活躍し

た。一時期下火になっていた狂歌の人気を復活させたことから「狂歌中興の祖」とも呼ばれた。

◎作品2 年もはや碁ならけちさす時分にて かつ色見えて梅もゑみぬる (家つと)

(大意) 今年も碁ならば終局の手続きである駄目を詰めるくらい押し詰まってきた。碁も勝てそうな見通しで、それと同時に梅も開花を予感させるようにつぼみが膨らんできた。

年末を迎えた状況を碁にたとえた狂歌で、「けちさす」は漢字なら「結さす」で終局が近づいた時点で有効な手段が少なく、駄目を詰めていく手続きのこと。この囲碁用語は平安時代の「枕草子」などにも用いられており、江戸時代になっても古典に詳しい知識層では一般的に使われていたのだろう。「かつ」は「囲碁に勝つ」という意味と、年末だが「それに加えて」(かつ) 梅が開花しようとしている(「ゑみ」=「笑み」でつぼみが膨らむ) 情景をかけて、奥深さを感じさせる。この歌も前作同様にさまざまな掛詞や表現の技巧が用いられている。

◎作品3 碁を打ちに居るべき筈をけふよそへ 行くとは理屈にたがひせん哉 (万載狂歌集)

(大意) 碁を打とうと思って友人のところへ足を運んだが「今日はよそに行ってしまった」とのことで無駄足になってしまった。今日どこかに行くとは理屈に合わない。

打つのを楽しみにして碁仇のところを訪問したが、いつもなら必ずいるはずなのにこの日に限って不在だったことの残念さを詠んでいる。「理屈にたがう(違う)」と碁仇との手合「互先」(ハンデなし) をかけている。碁のことを詠んだ狂歌には、本作のように碁が打てないことの淋しさを詠んだものが多い。

本作は天明3年(1783年)に刊行された『万載狂歌集』の中の作品。表題の「万載」は平安時代末期の勅撰和歌集『千載和歌集』になぞらえたもので安土桃山時代に興った芸能「三河萬歳」にもかけている。選者は四万赤良(太田南畝)で江戸勤めの幕府の御家人として高位に上りながらも狂歌師としても名を残した。特に、上方が中心だった狂歌の流行を江戸に広めた功績で知られる。

◎作品4 をののえをくたせし碁とはうつてかえ 象戯のさしもろき常なき (狂歌柳下草)

(大意) 斧の柄を腐らせてしまうほど長い時間が過ぎる囲碁とは打って変わって、象戯(将棋)はどうしてこんなにも脆いものなのだろうか。

作者は前出の油煙齋貞柳に学び、狂歌の隆盛に尽力しその作風から「栗派」と呼ばれる一派をなすまでになった栗柯亭木端。本作は囲碁伝説の中でも有名な「爛柯」の故事を基に詠まれ

ている。木端の弟子の柏木遊泉は『狂歌柳下草』の詠者でもあったが、好きな将棋を指しながら天寿を全うしたことを追悼して師が詠んだのが本作である。

囲碁は「爛柯」の故事のように一局が終わるまでに斧の柄が朽ちてしまうほど、とてつもなく長い時間を要することにたとえられ、象戯（将棋）は対照的に短い時間で終わってしまうと表現している。大坂の寺の住職でもあった木端は弟子の逝去を悼み、人の命の儚さを碁と将棋を比べて詠んだ。

◎作品5 打よする碁石の数に日はみちて 暮行年にかこふ手もなし（狂歌君が側）

（大意）今年も碁盤の目の数のように押し詰まり、年の瀬が打ち寄せてくる（打よする）ようだ。自分にとっては年が暮れてきても、碁を打つときのるように地を囲う（お金を確保するの意）手段はなさそうだ。

江戸時代、日々の生活に追われる町人や下級武士にとっても年末は新しい年を迎えるための準備が必要であった。碁盤の目は361あり、その目の数と同じような1年の日数も残り少なくなってきたし、相手の石が押し寄せてくるような厳しい状況だけれども、年の暮れに碁で地を囲うような金銭的余裕を得る方法（手）はない。作者の厳しい生活を碁にたとえて詠み込んだものだろう。この歌が掲載された『狂歌君が側』は上方狂歌で宝暦12年（1762年）に発刊された。苦しい身の上を日ごろ親しんでいる碁にたとえ、諧謔的な味わいのある歌。

〈3〉浮世絵・伝統芸能における囲碁

日本の絵画の歴史は古代の絵巻物に代表されるように平安時代に日本的な作風が発達し「大和絵」と呼ばれるようになった。盤上遊戯の中では囲碁や盤双六がしばしば絵巻に描かれた。将棋も平安時代中期には貴族や僧の間に普及していたが、絵巻の題材になることは囲碁と比べるかに少なかった。

数百年の時を経て江戸時代に入ると庶民文化の隆盛とともに菱川師宣（1618年～1694年）によって浮世絵の文化が開花した。多色刷りが一般的になった明和・安永期（1764年～1784年）以降はしばしば囲碁・将棋の対局風景や碁盤や碁笥と碁石、将棋の盤駒が絵柄として登場するようになった。それだけ囲碁・将棋は人々の間に浸透し、親しまれていたのだろう。本章では浮世絵に描かれた囲碁や伝統芸能に登場する囲碁とそれらの意味について考察していく。

◎作品1 「金烏玉兔倭入船」三代歌川国貞 1852年（嘉永5年）



(東京都立中央図書館特別文庫室 所蔵)

吉備真備（695～775年）は備中国出身の公卿で、まだ若い20代半ばのときに遣唐使として唐に留学した。現地では18年の長きにわたって儒学や兵学、天文学、音楽など多くを学び、日本に帰国後朝廷に献上したとされる。真備は元正天皇から聖武天皇、孝謙天皇、淳仁天皇、称徳天皇（孝謙天皇が重祚）、光仁天皇まで6代の天皇に仕え、朝廷の信頼も厚く右大臣まで出世した。

中国から持ち帰った知識のうち一つが囲碁だったという言い伝えが『吉備大臣入唐絵巻』などに描かれ、現代においてもしばしば真実として記述されるが、これはフィクションである。真備の物語は平安時代に大江匡房が残した説話集『江談抄』を基にしたもので、囲碁が奈良時代以前に日本に伝わっていたことは中国の正史『隋書倭国伝』に記されている。聖武天皇の宝物である正倉院の「木画紫檀碁局」も奈良時代以前に日本に伝来したものであるから、囲碁は真備入唐以前に日本に伝わっていたことは明らかだ。

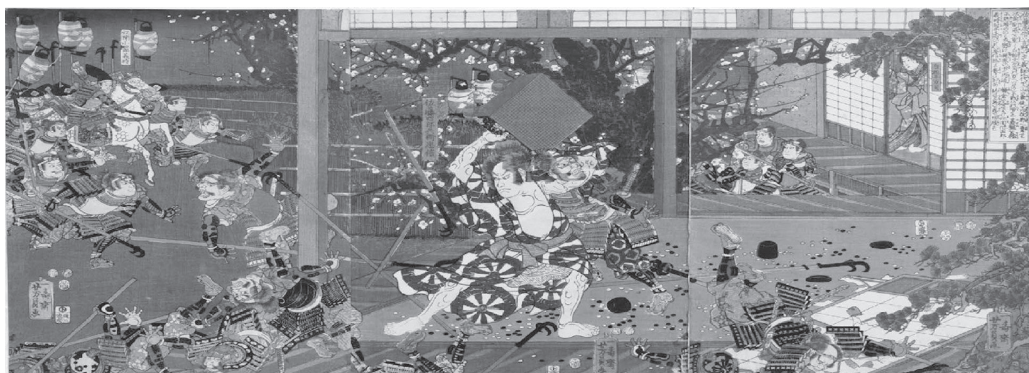
吉備真備のエピソードは江戸時代に歌舞伎の演目となり人気を博した。碁を打つ場面は浮世絵にも多く描かれ、当時の俳諧などにも真備が囲碁を持ち帰ったと記され、現代と違ってさまざまな情報にアクセスすることができない庶民は信じていたのだろう。

本作は芝居絵と呼ばれるもので、幕末に上演された『金烏玉兔倭入船』（きんうぎょくとわこくのいりふね）を題材に描いたもの。真備が遣唐使として入唐し、陰陽道の聖典を天竺から中国を経て日本に持ち帰るといふ話で、真備（吉備大臣）の相手をしているのは唐の玄宗皇帝

の配下で碁の名手・呉大尉玄東。そばに玄東の妻がいて助けるという設定だが、玄東の背後にも真備と同時期に入唐し日本に帰国することのなかった阿倍仲麻呂が霊として登場し真備を助けている。仲麻呂が登場し真備を助ける物語の設定は『吉備大臣入唐絵巻』と同様で、江戸時代に暮らす人々にも広く知られていたのだろう。全体は青を基調とし、神秘的な印象を演出している。

作者の歌川国貞（1786年～1865年）は初代歌川豊国の門人でのちの三代豊国。「源氏絵」流行を起し、歌舞伎への影響も大きかった。活躍期間が長く、作品の量が多いことでも有名。

◎作品2 「佐藤四郎兵衛忠信」歌川芳員 1852年（嘉永5年）



(大阪商業大学アミューズメント産業研究所 所蔵)

物語や演劇の中で「碁盤忠信」の異名で知られる佐藤四郎兵衛忠信は平安時代末期の英雄、源義経の家臣で実在の人物。もともとは奥州藤原氏の配下で、藤原秀衡の命により義経の郎党として平氏追討に加わり忠臣として活躍した。

忠信は江戸時代の浮世絵の中で最も多く描かれた武者の一人だ。義経とともに平氏を滅ぼしたのち、源頼朝の追っ手から命懸けで主君を守り、最期は逃避行を続ける義経の囹となって京都で敵に囲まれ奮戦ののち自刃したという。

忠信の名は室町時代の軍記物語『義経記』に登場し、それを基に江戸時代になって歌舞伎や人形浄瑠璃の名作『義経千本桜』に登場する狐忠信（源九郎狐）のモデルとなった。

忠信の姿は絶対権力に批判的な庶民の「判官びいき」もあって勇壮に描かれる場面が多く、碁盤を片手で持ち上げ戦っている場面は有名だ。舞台の筋書きでは、京都に潜伏していた時に愛刀を親しい女性の裏切りにより隠されてしまったため、素手で戦ったという。

多くの浮世絵師が忠信を描いているが、本作の作者である歌川芳員（生没年不詳）は歌川国芳の門人で江戸末期から明治初期に活躍し、武者絵や花鳥画を得意とした。また「横浜絵」と呼ばれる異国文化を取り入れた流行の作風の先駆者でもあった。

◎作品3 「誠忠義士伝 小野寺藤右衛門秀留」歌川国芳 1847年（弘化4年）



（大阪商業大学アミューズメント産業研究所 所蔵）

封建制の根幹である身分制度こそ変わらなかったが、太平の世となった江戸時代の庶民気質は権力に対する反骨精神が文化、芸術などさまざまな分野で表出するようになった。本作を含む連作物の「誠忠義士伝」が初めて描かれた1847年（弘化4年）は不評だった天保の改革（1841年＝天保12年開始）、さらに改元の理由にもなった江戸城本丸の火事（天保15年5月）と災難が続いている状況下で幕府の財政はひっ迫、しわ寄せを受ける庶民の不満はたまっていた。

現代でも歌舞伎や時代劇などの人気演目である「忠臣蔵」は江戸中期の1701（元禄14）年に赤穂藩の浪士が主君浅野内匠頭の仇討を果たすため吉良上野介の屋敷に討ち入りした、いわゆる「赤穂事件」を舞台化したもので、1748年に

『仮名手本忠臣蔵』として人形浄瑠璃が初演となり空前の人気を博した。

本作に描かれている小野寺藤右衛門秀留は、赤穂藩に仕え大石内蔵助の右腕となって活躍した四十七士の一人小野寺幸右衛門秀富がモデル。当時は幕府の権威に配慮して、実名を少しだけ変え登場人物にすることが行われた。もちろん観客の側には登場人物の本名が誰かはすぐわかる改変であった。

「誠忠義士伝」は幕末に歌川国芳が仮名手本忠臣蔵を題材に描いた連作である。本作に描かれた幸右衛門は吉良邸討ち入りの際に表門隊として先頭で突入し武勇を発揮した。その際、屋敷に入って床の間にあった半弓の弦を斬り吉良勢の反撃を封じたという記録も残っている。碁盤は格式のある武家にとっては常備品で、おそらくは床の間のある部屋のどこかに置かれてい

たものだろう。

◎作品4 「碁太平記白石噺」五風亭芳虎 江戸後期



(大阪商業大学アミューズメント産業研究所 所蔵)

奥州白石（現在の宮城県白石市）に語り継がれる、父を殺された姉妹が仇を討つ18世紀『奥州白石噺』を基にし、江戸時代初期に起こった慶安の変（1651年）と合わせて脚色した歌舞伎、人形浄瑠璃（文楽）の演目が『碁太平記白石噺』である。長編のためすべての段が演じられることはまずないが、現代でも歌舞伎では2004年の市川海老蔵襲名披露公演など、文楽では2021年春に国立文楽劇場で「浅草雷門の段」「新吉原揚屋の段」が上演された。題名につけられている「碁」は江戸前期に記された歴史物語「後太平記」と、地名である「白石」を碁の白石にかけたもの。

本作の絵の中には各段のハイライトが示されており、右下には「碁立の段」と思われる碁の対局場面も描かれているが現代では演じられていない。「碁立」は現代の言葉では「布石」を意味し、この段では姉妹の仇討に関する手立てを軍師役の宇治常悦が姉妹のために思案し、セリフの中には囲碁用語が多数用いられていたとされる。

あらずじは作品ごとに時代設定が書き換えられ細部も異なるが、基本となっているのは田んぼで草むしりをしていた元々侍だった農夫が、誤って侍の袴に泥をかけてしまったため斬り捨てにされ、その父の仇討を願う姉妹の物語。姉・宮城野は父の借金の肩代わりで遊郭の傾城と

して江戸・吉原で奉公、妹・おのぶが奥州から上京し再会するあたりは共通の設定。姉妹に剣術を指南するのが軍学者で浪人を余儀なくされていて武士の信望が厚かった由井正雪で、正雪は浪人となった武士たちの不満を背景に幕府に対し反旗を翻そうとした慶安の変の首謀者。人形浄瑠璃では設定が南北朝時代になったり正雪の役柄が宇治常悦に置き換えられたりしている。いずれにせよ封建社会における理不尽な権力に対する庶民の願望を反映したものであろう。右下にある作者名、五風亭貞虎は江戸時代の浮世絵師歌川貞虎のこと。初代歌川国貞の門人で合巻の挿絵や花鳥画、美人画、役者絵を得意とし文政から天保年間に活躍した。

◎作品5 「芳年漫画」 「天延四年秋妖怪土蜘蛛惱源頼光寝所酒田公時等宿直欲払其妖図」

月岡芳年 1886年（明治19年）



（大阪商業大学アミューズメント産業研究所 所蔵）

禿（遊郭に住み込みで手伝いをする童女）に変じて源頼光の館に現れた土蜘蛛の妖怪を、坂田公時が寝たふりをして妖怪の隙を窺っている場面を描いたもの。うっすらと開けた公時の眼光が鋭く印象的だ。枕代わりに寄りかかっているのは漆の蒔絵が施された碁盤で、格式高い武家の家にある碁盤はこうした装飾が施されていたことを示す。蒔絵の絵柄になっている家紋は清和源氏頼光流の家紋であろうか。碁盤は本作の重要なアクセントとして状況を表現している。

公時は平安時代の武士で幼名を金太郎といった。現在でも多くの「金太郎伝説」が存在するのは公時の故事を基にしている。土蜘蛛は古代の大和朝廷に従わぬ人々（主に地方の豪族）に対する蔑称の意味も含む、蜘蛛の姿の妖怪。頼光は『平家物語』にも登場する武将で酒呑童子退治や鬼退治などの勇者伝説があり、公時は「頼光四天王」の一人として活躍した。

作者の月岡芳年（1839年～1892年）は歌川国芳門下の浮世絵師で幕末から明治初期にかけて活躍した。武者絵を得意とし独特の画風で知られ、古代から近世までの英雄、武将を描いたシリーズ物「芳年武者無類」²⁾は有名。芳年の大胆な筆致は後世の漫画や劇画に影響を与えた。本作は明治維新後のものだが構図自体は幕末の浮世絵のスタイルを保っている。ただその筆致は細密で江戸期の作品に比べると近代的な雰囲気を感じさせる。

〈4〉結語 囲碁は江戸時代、公家や武士から町人まで共通の文化であり言葉だった

江戸時代は初期の1612年（慶長17年）に幕府から本因坊算砂ら碁打ち衆に俸禄が与えられるようになり家元制の基礎が確立した。これ以降囲碁が為政者から公式に認められる技芸となり、これにともない、それまでのように武士階層が囲碁を習得するばかりでなく、比較的裕福な町人層も碁を楽しむようになり、次第に庶民にも広まっていった。

本稿では江戸時代に流行した川柳、狂歌、浮世絵と囲碁の関係について江戸後期以降の作品を中心に現代の遊戯史研究者の視点から分析し考察してきた。川柳は主として庶民の文芸、狂歌は主として知識層に親しまれ、その中に碁を題材とした数多くの作品が詠まれた。芸能としての歌舞伎や人形浄瑠璃（文楽）は幅広い階層に支持され、舞台や伝説を基に描かれた浮世絵は同様に大衆から知識層まで親しまれ現代においても世界的な絵画の一ジャンルとなっている。いずれの分野でも題材として囲碁や碁石に関連する言葉が多く用いられ、人々の生活や習慣に深く浸透していたことを証明している。碁盤と碁石は武家やある程度余裕のある町人の家に備わっていただろうし、現代では熱心なファンでなければ理解できないような囲碁の専門用語も、人々にとっては普通に使われている言葉だったに違いない。

明治維新により囲碁の家元制度は崩壊し、幕府の後ろ盾を失った家元の棋士たちの生活は不安定になったが、幅広い階層に支持されていた囲碁は明治期に勃興した新聞社や財界という新たなスポンサーを得て、棋界隆盛の歩みを進めていった。明治期に入って狂歌の文化は衰退したが、囲碁を題材とした川柳は多く詠まれ、歌舞伎や人形浄瑠璃の中でも囲碁は生き続けた。

〔注〕

- 1) 平安時代から室町時代に流行した予言詩。中国の予言者あるいは日本の作とされるが偽書という説もあり
真相は定かでない。室町時代に作られた『野馬台縁起』（東大寺所蔵）が現存する最古
- 2) 日本武尊や野見宿禰から木下藤吉郎の時代まで、多くの作品がある

〔参考文献〕

- 越智信義・著『将棋の博物誌』 三一書房 1995年
古作登・著『絵師が描いた囲碁将棋十選』 日本経済新聞 2019年9月16日～9月27日
小松成美・編『日本絵巻大成3 吉備大臣入唐絵巻』 中央公論社 1977年
増川宏一・著『日本遊戯史』 平凡社 2012年
増田忠彦・著『囲碁 語園』（上・下）大阪商業大学アミューズメント産業研究所叢書 2012年
宮田正信・校注『誹風柳多留』 新潮日本古典集成 新潮社 2019年

